

「実朝の独創性」―『百人一首』入集歌を根底に―

早川 昌成

【前編】はじめに

鎌倉時代の歌人・源実朝の魅力について、考察を試みる。
現代短歌結社の本誌になぜ、実朝か。

第一の理由は、実朝の歌は現代の言葉と感覚からもわかりやすい歌が多く、短歌における詩的リズムと表現を追体験しやすいと思うからである。実朝は2022年の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にも登場。柿沢勇人演じた実朝は人気が高く、ご記憶の方も多かろう（さらに古い記憶のある方は、同じく大河ドラマ「草燃える」（1979年）での実朝役・篠田三郎の好演も思い出されたかもしれない）。

第二の理由は、実朝の歌の多くが題詠や本歌取りであることだ。私は、高校生に長年、短歌の創作を指導した。そして、この題詠や本歌取りという、現代では多くは試みられない中世歌の特徴的手法が、現代の若い歌人の詩的空間の創造に有効かと思いつているからである。

無論、実朝には実景による感動を詠んだ歌も少なくない。しかし、將軍として、生涯、鎌倉と周辺を出ることはなかった。そんな実朝は古歌に倣い、全国の歌枕を想像で詠んだり、

名歌の心を汲み、その名歌を踏まえて独自の創造を試みたりした。

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまや
の秋の夕暮れ

実朝の歌の師である藤原定家の若き日の作品である。二十歳の定家が發揮した天才は腰の「なかりけり」に集約されている。何もないものを取って「なかりけり」と言い切った点が見事だ。この歌は生徒の鑑賞を深めやすく、また広げ得る作品であった。また、この歌が題詠だと伝えると生徒の驚きはさらに増した。

高校生には、この題詠に倣う手法は有効だった。漠然と「歌を作れ」では散文の断片を書き付けるばかり。私は昔、「棧橋」で勉強した方法を真似した。例えば、まず「夏」の語を詠み込み、次に「夏」「時刻」を入れ、さらに「夏」「時刻」と「オノマトペ」のある歌を詠むという具合に、条件を増やして実作していく。このように条件があった方が、生徒は取り組みやすい様子だった。

こうした実作体験を経て、高校生たちは教科書の和歌・短歌に主体的な鑑賞を示すようになった。詩的真實追究の過程

において、その手段が必ずしも写実によらなくても良いと知るのだ。そして、題詠における想像が、むしろ個人的な創造空間を成し得る可能性に注目する。そして、その手法において実朝には良い歌が多い。

また、実朝歌の魅力を語る上で欠かせない第三の理由がある。それは多くはないが、「自然」と「人事」が一体となった詠みに人間らしい優しい心がこもる歌があることである。ここで、現代短歌における例を引く。

我の名を忘れてしまつた祖母は今

微笑んでいる

桜満開

第10回「短歌甲子園」個人戦最優秀の作品。この歌に初めて接した時、感涙が止まらなかつた。この歌こそ「自然」と「人事」が一体となつて、人間の愛とかなしみを凝縮した一首だと思ふ。この手法は実朝歌にもそのまま当てはまる。実朝歌の魅力は「生さとし生けるもの」に通う愛情が素直に、かつ繊細なニュアンスで詠み込まれている点にある。

一 「世の中は」の歌への疑問

最初に紹介する実朝の「自然」と「人事」が一体となつた傑作は『百人一首』入集歌、

世の中は常にもがもな渚漕ぐ海士の小舟の

綱手かなしも

である。月並みな歌と思われたかもしれないが、私はこの歌を従来の解釈とは異なる意味で、実朝の獨創性を根底に示す

歌として評価したい。

この歌は、古くから『古今集』東歌の

陸奥はいづくはあれど塩竈の浦漕ぐ舟の綱

手かなしも

(読人不知)

を本歌とし、また『万葉集』の

河上のゆつ岩群に草生さず常にもがもな常

娘に

(吹矢刀自)

を参考にその第四句を取り入れたものとされている。

従来の多くの解釈は、「かなし」を無常(悲哀)の意とするものであつた。漁民への憐憫の情を通し、世の無常の悲しみ故の、変わらぬ平和の世の希求を主題とする歌とされてきた。しかし私は、この解釈にはかねがね、疑問を感じてきた。実朝がこの歌に託した主題や意図、また定家の評価(定家は、この歌を『新勅撰集』にも入集する)が「無常の世ゆえ常なるを願う」という単純にあるものであろうか。

実朝自選とされる『定家所伝本金槐和歌集』(以下、『定家本』)では、自然や人事に同情や憐憫の情を主題とする歌には、詞書きに作歌事情や思いを具体的に記す傾向がある。しかし、『定家本』におけるこの「世の中は」の歌の題は「舟」のみである。漁民への同情は動いたかもしれないが、実景に着想を得つつ、漁民への生活の労苦への哀れみを主題とするならば、より具体的な詞書きが記されたと思う。

『金槐和歌集』は古歌に倣つた習作の域を出ない作品も多い。その点を踏まえれば、実朝は古歌の用例、用法に忠実であらうとしたと考える。そこでこの歌の各句の歌語の意味や

背景を考え、また『定家本』の「雑の部」の配列を追うと、従来の解釈とは大きく異なる意味が浮かんできた。

即ち、初句の「世の中」は古来の「男女の仲」の意を含み、現実には接し得なかつた両親の仲良き姿や兄弟の睦まじき心、望み得なかつた両親や兄から自分に注がれる変わらぬ深い愛情の希求を根底に置く歌かと思ひ至つた。家族間の優しさや人間への思いやりの心をこめた歌にこそ実朝の獨創性は發揮されていると思う。その意味で「世の中」の歌は実朝の詩心を解く鍵となると考えている。

二 「世の中」の歌の解釈

「世の中」の歌は、表現自体は芸術的に高いものではない。「綱手かなしも」というフレーズも、管見では本歌と実朝歌以外に用例が見あたらないが、観念的で新鮮に響かない。しかし、万葉の調べを生かしつつ、本歌のイメージと鎌倉の海の実景との二重写しに実朝の才が發揮された歌であり、自然観照を通して無意識のうちに人生観照をも表出している点は見事である。

『定家本』の詞書「舟」は、「はかなき世の浮き沈み」を歌の主題としたと思うが、定家は『新勅撰集』では、この歌を「羈旅」の部に配している。定家は、『顯注密勘抄』に、本歌の「かなしも」を「まことに悲歎にはあらず、おもしろし」と云やうなる詞也」と注している。

また実朝が参考にしたかもしれない同時代の歌論書『袖中抄』にも、著者・顯昭は、本歌について「しほがまをめづる

心」と解釈し、「悲哀」の意に取ろうとする他説を悉く否定している。定家と顯昭の解釈は、同一次元には捉えられないが「悲哀」の意を打ち出していない点で軌を一にする。

「自然」という永遠の風光明媚を愛で、そこに生活を営む「人間」の無常を愛おしむ。「自然」と「人事」を一体化するなかに優しい人間の心をこめていく。そうした手法を実朝は『袖中抄』から学び、また定家の評価がその手法の成功例を称えた可能性は高い。

『古今集』本歌は元来、佳景の哀惜を趣とし、海人の現実生活とは何の関係もない発想だが、実朝の歌は、それが実景か否かを問わず、観光意識とはかけ離れた次元で制作されており本歌と異なる。

定家は本歌を「おもしろし」と捉えている以上、実朝歌にも「おもしろし」の心を見る。定家がこの歌を採つたのは、本歌が「面白し」だったものを、そこに無常の思想を見いだしたからではない。この歌を「羈旅」の部に配した定家は本歌と素材を同一次元におき、「渚こぐ海士の小舟の綱手」の様子を「旅」の一風景のイメージで実朝歌を捉えた。観光イメージをこえ、一二句にこめた情愛の念を万葉の時代がない手法で万葉的詠み口に生かし、独自の思想が「旅」における古歌の情趣上に形成された点を評価したと思う。

実朝の古歌の用法用例に忠実であろうとする作歌態度を根底におけば、初句の「世の中」の語は「男女の仲」の意を含みつつ、小町の「色見えで」の歌や貫之の「世の中は」の歌に学んだものか。

第二句「つねにもがもな」は、本歌の『万葉集』の「永遠の青春不変」の主題に着想を得、詞書にある大友皇子の妻ながら高市皇子にも思いを寄せ、壬申の乱後、天武のもとに戻った十市皇女とその想いを代弁した吹茨刀自「常にもがもなとこをとめ」の青春、恋愛の不変のイメージを「世の中」の語に直結させたとも読める。

第三句の「渚」は多く「無き」に掛けられる語であり、「出会ふことがないもの」の象徴であった。実朝が親しんだ海の渚の光景に両親の深い愛情を思慕する発想が湧いたかともみる。「海士の小舟」は万葉の時代から生活に密着した存在であり、人々の平穏な生活の象徴として歌われた。平和で戦乱のなき世を想い、その平和の世に家族の深い愛情を願う心が伺われる。

さらに第五句「つなで」は古くから人の愛情の結びつきや寛恕の心が託された象徴であり、また『源氏物語』須磨に描かれるように男女のたゆたいの象徴でもあった。こうした背景に加え実朝は『万葉集』の

人言はしましそ吾妹綱手引く海ゆまさり
て深くしぞ思ふ

の歌にみるような「綱手」を媒介として「海ゆまさ」れるごとき両親や兄弟の不変の情愛を求めたと思う。結句の「かなし」は多く「悲哀」の意で用いられるが、『万葉集』東歌では多く「愛おしさ」の意で用いられる。東国に根付く実朝が東歌の用例に親しみを感して不思議ではない。

三 『定家本』雑の部の配列から

実朝歌を男女の恋のイメージから捉えるべきとの思いは『定家本』雑の部の配列を検討すると強くなった。『定家本』は、古来、指摘されるように実朝自選の可能性が高い。特に雑の部は自らの意識が色濃く反映されていると思う。

雑の部の配列は主題ごとにまとまりがあり、「1」四季から、「2」老い、「3」葦「舟」「千鳥」「鶴」、「4」幼子、弱者、「5」仏教的無常観、「6」自然、人事、「7」神祇、述懐、「8」太上天皇御書下預時歌」と続く。明らかに異質な抽象性に浮かび上がるのが、「3」「葦」「舟」「千鳥」「鶴」の四首である。この「老い」と「幼子」の間に位置するこの四首こそ「青春不変」の願いが込められているのではないだろうか。四首とも水辺の情景に恋の主題が関わる単独の詞書きであり、すべて、人を想う歌、男女の行く末の不安が歌われたテーマである。この四首には恋の永遠、変わらぬ愛情を願う実朝の心が色濃く見える。

「世の中は」の歌もその思いに読まれるべきと思う。「世の中は」の歌は恋の不安を根底に、はかなき世を生きるつらさと愛情不変をも願う歌ではないかとの思いは、この『定家本』の配列をしていっそう強まった。『百人一首』を貫く意識は、王朝の文化を恋歌で凝縮、再現せんとするものでありその意味で選ばれた歌と思う。

【後編】へつづく